

がある。学校でのイジメである。男子生徒も女子生徒もイジメにあうが、男子生徒の場合、自殺にまで追いやられることも多い。「男なのだから、耐えて我慢しよう。それが男だよね。」そんなこだわりが、死にまで追いやってはいないか。

勇気をもって訴えたでしょう。「よく、学校でパンツを脱がされるイジメにあっています。助けてください。」と。この場合、教師や親は、どのような声がけを男の子にするだろうか。「お前が、男らしくないから、イジメにあうのだ。」こんな一言が、被害者である男の子に浴びせられる。痴漢にあった女性が「あなたの服装が悪い。」などと言われてきたのと共通する問題だ。男の子たちは「話さなければよかった。自分は男らしくないダメ人間なのだ。」と自己否定してしまう。ここでも、感情を殺す仕掛けが用意されていたということになる。

コミュニケーションを苦手とする男性が多い。感情表現と言い換えてもいい。自分が何をしたいのか。相手に何をしてほしいのか。うれしいのか。かなしいのか。いまの気持ちを素直に相手に伝えることを苦手とする、つきあいベタの男たちがいる。

子どものころから、男女がたがいを

尊重し対等に生きることがを学ぶ人権教育をし、また、コミュニケーション能力を高め、感情豊かに生きる術を工夫することが大切だと考えている。

ありのままの自分を生きるために

現代においても「男は強く、女はやさしく」という考えが、ジェンダー(社会的・文化的につくられる性差)規範として根強く残っている。ジェンダー規範では、「男の強さ」は「力、泣かない、負けない、弱音を吐かない」、「女のやさしさ」は「気配り、控えめ、従順さ」として評価される。そして、女・子どもは弱く、ゆえに男は強くなって女・子どもを守り、女・子どもは守られるために男に従うものという構図が見られる。しかし、性別で決められたことに合わせるのは、誰にとっても生きにくいこと、その「らしさ」への抑圧から様々な暴力が生み出されている。子どもの持つ力を信頼し、存在意義を認め、働きかけることでその力を発揮できる状態にすること。性別ありきではなく、子どもたちが互いのあるがままを受け入れ合い、その多様な可能性を認め合える心地よさや必要性を考えるきっかけづくりになればいい。

第 16 回

Segaの本棚



♂女性別がない！～両性具有の物語～

新井 祥(ARAI SHOU) 著／ぶんか社

タイトルからしてどういう内容の本かということとは察しがつくと思う。

この本は実話の4コマ漫画で構成されているが、さて作者のプロフィールを見てみよう。「作者・新井祥は30歳まで女性として暮らしてきたが、染色体検査で両性具有(半陰陽)と判明。男性化したり女性化したりする自分の体質の謎が解け、縮胸手術を受ける。以後、男性として創作活動を続ける。」とあった。現在は名古屋デザイナー学院の講師を務めているらしい。男性化以前は風俗漫画家として、風俗レポ漫画を描いていたそう。

昭和のジェンダー問題や腐女子研究のネタ等も含めて、美少年アシスタントとともにセクシュアルマイノリティについて考察しながら進められている。

元夫(IKKAN)が登場したり、男として生きていくための大事な道具(?)の具体的な話も掲載されている。

インターセックスは日本では年間2,000人に1人の割合(日本ではだいたい1年間に600人弱)で産まれているといわれている。内分泌系の異常や外見上の性別が性染色体上の性別とは逆であったり、外性器・内性器の形の異常、性腺が睾丸もしくは卵巣に分化していない、もしくは両方を含む。そして二次性徴が異常に早い、起きない、あるいは育てられた性とは別の性の特徴を持った二次性徴が起きる。等などインターセックスと呼ばれる状態にはさまざまな症状がある(参考:日本インターセックス・イニシアティブ・www.intersexinitiative.org/japan/faq.html)

『男?』『女?』『性別?』って何だ!?!『性差はある!!』男になったり女になったりする俺が言うのだから間違いない!』と豪語する作者の作品を是非ご購入あれ!
中村 淑子